

# 京鹿子

第 10 卷 第 10 号  
1981 年 10 月 10 日



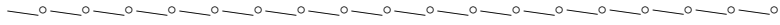
10月号

豊田都峰

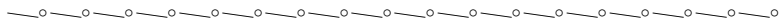
滙響集 その五十

里山のひぐれ高きに残る蝉  
熱帯夜星に窓貸すこともして  
風の私語聞いては源五郎浮き沈み  
窓の辺の午後はカンナの詩ごころ  
天の川にまぎるる一灯山に泊つ  
銀河落つ地平ひたすら闇を生む





ここにまた六道の辻草茂る  
釈迦在すみ寺は青楓の雨  
あだし野の施餓鬼なごりの辻仏  
あだし野の吊灯笼の残り香  
盆すぎの里の土橋は風ばかり  
新涼や葉ふやさん嵯峨の径  
ひぐらしの鳴きつぎ影絵劇はじまる  
ひぐらしの鳴きつぎ影絵劇はじまる



—丸山佳子作品—

# 曉しづく

丸山佳子



露 つ た ふ 嵯 峨 あ か つ き の 竹 の 肌  
素 逝 忌 の 雨 と お も へ ば 光 り け り  
旅 あ は れ 早 稲 の 案 山 子 に 向 ひ あ ふ  
谿 ふ か き 一 枝 も ひ か り 鴟 日 和  
長 命 を 約 し て 柿 の 坂 く だ る

## 秀華採集

竹落葉までも景色に植治の庭

安田 吳遊

疎水の水を利用、東山を借景として多くの別荘庭園を作庭したのが「植治」、七代目小川治兵衛。すべてを知り尽くした庭造りであると、具体的に表現している点を評価したい。

小暑かな遺跡の桃の種数へ

山中 志津子

あらざらむ隙だらけなる梅雨の傘

金子 野生

長い時間の中の成果であろうが、今「小暑」の中でこつこつとやらねばならなし、またあつてはならないことが今起こっている。ともに今の姿をとらえてよい。



— 近 詠 —

鈴鹿 仁

秋のこゑ

熟るるもの震へとなりて水の秋  
初あきつ廻れ回れの池ほとり  
わらべ唄一ぼん径の野分晴  
一途さにこの径をゆくあけちちろ  
嵯峨みちのいづく歩くも秋の声



— 近 詠 —

和田 照海

朱夏

回 天 の 島 万 緑 に う づ く ま る  
遺 書 は み な 天 を 回 ら す 文 字 の 黴  
終 章 を 端 折 り 青 葉 の 基 地 発 進  
青 葉 潮 回 天 未 だ 浮 上 せ ず  
回 天 の 母 散 骨 の 海 の 朱 夏

神薙集



空梅雨 北村香朗  
空梅雨と言はれる程の雨少な  
梅雨入り今年としては長々と  
何となく空梅雨らしき空模様  
毎日が晴天とあり梅雨の天  
灯ともしてケアセンターの長廊下

昼寝覚 藤岡紫水

推古より玉虫の魂鎮む厨子  
草の香のそこはかとあり夏の月  
束の間の夢はみづいろ昼寝覚  
雷遠しコツプに氷丸く浮く  
月涼し湖は鱗の波たたみ

松田都青

正直な返事下さい梅雨の恋  
一冊を抜けば倒れる梅雨の棚  
はつたいや楽譜のいらぬ子供唄  
単線の今日も遅れて待つ夏野  
みな旅人と思へば安し夕端居

秋深し 竹貫示虹  
白菊に埋もれし友のしづかなる  
涙目をあやふく支ふ十三夜  
温め酒いたはるやうな遺影の目  
秋の暮五人家族が今一人  
トンネルの向かうの口に秋の空

凡人ぐらし 北川孝子

風みどり生絹のやうな雨の午後  
身につきし凡人ぐらし小暑来る  
日暮虹木綿のシャツに風抜けて  
自己流の思惑に足り夏みかん  
これよりはゆるゆる行かな梅雨入冷え

蟬 柴田朱美

蟬時雨その静寂の中の寺  
徑らしき径もここまで蟬時雨  
地団駄を踏むかのやうに油蟬  
古寺の縁の木目に蟬骸  
終焉の刻を惜しみて法師蟬



# 神麓集



青 夜 丸 井 巴 水  
百段の序の口にゐて汗を拭く  
青嵐ひそと古刹の狼煙岩  
隴夜や詩集の隅を三角に  
青空へ一音ありて日傘の娘  
川の字にひとり背向けて寝る青夜

赤い小鳥 塩 貝 朱 千  
酔妃蓮つぼみを誰も覗きゆく  
蓮四日風のままなる乱れやう  
天の川むかし昔の夢手繰る  
赤い小鳥来よ赤い花啄ばみに  
星屑をはらりはらりと花槐





# 京鹿子集

## 豊田都峰選

竹落葉までも景色に植治の庭

出初めは水鱧と呼び碗種に

竹落葉踏んで晋山式の偈を賜ふ

鉄線花ならぬことゆゑ逆らはす

小暑かな遺跡の桃の種数へ

ほたるぶくる積木の町を灯しゆく

筋書に足す香水のひとつく

コンパクト薔薇の香を入れて閉づ

あらざらむ隙だらけなる梅雨の傘

風の日は力を抜けり花菖蒲

京都 安田 呉遊

京田辺 山中志津子

青梅 金子 野生

花菖蒲影にも風の離れざり

百日紅火生三昧模す堂裏

白き窓オハイオシンボル花みづき

夏休みスケボー曲乗りはしやぐ声

朝日影夜遊び鹿の子迷ひ道

星条旗独立記念日遠花火

花菖蒲祖母の面影神宮苑

夏休み子の予定聞き旅支度

夕涼み祖父に勝つたよ将棋盤

懐かしい子の写真見る遠花火

オハイオ 水谷 直子

アリゾナ 伊吹 之博

ちちははもはらからもゐて青簾

札幌 野村 鞆枝

参道の手すり頼りて梅雨さ中

さざ波を湛へてをりぬ濃紫陽花  
抱きとめるやんちやの正義青葉風  
考へる眉美しく水の夏

借景も墨絵の如し梅雨の寺

六月の扉の奥の扉かな

佐々木紗知

登り来し門前町は梅雨さ中

酒田 藤波 松山

入梅の関所の跡や蔦盛り

裏道はふんはり曲る蝉の声  
人体の薄きところに瑠璃揚羽

山霧の行きつく所梅雨の空

ポケツトに風南天の花真白  
青蜥蜴石のまろみに息残す

高野 春子

炎昼に杭打ち家の境決め

藍色の夢ばかりなり水中花

高野 春子

薔薇咲いて無人の庭の昼さがり

少年の恋手のひらの雨蛙

高野 春子

傷心に届く百合の香友の愛

渋川 東 秋茄子

七色に水平線の虹の立つ

父の日や真新しきはポロのシヤツ

布川 孝子

復興の遠きを思ふ夏の海

梅雨寒し候補の説法絵空ごと

布川 孝子

被災地は三度の夏や雑草のみ

さいたま 神田 惣介

子燕も巢立ち虫追ふ旅準備

団塊のアロハいろいろコミユニテイー

浦安 安田 一郎

梅雨晴間棚田に映える白き雲

冷さうめん始めましたと銀座裏

浦安 安田 一郎

ステツキの柄も多彩に夏めきぬ

小さき足山頂目指す夏帽子

浦安 安田 一郎

夏の園父子砂遊び母ベンチ

千葉 伊藤 希眸

俳聖の山に枝折りの牡丹咲く(黒羽)

ヤッホーを見守る山河合歓の花

浦安 安田 一郎

斑鳩の声激し割箸われずゐる

兄弟で川に跳び込む浜ひるがほ

浦安 安田 一郎

蕉翁のゆき盡くあたり罌粟真つ赤

朝日浴び稜線見上ぐ夏帽子

浦安 安田 一郎

しらじらと梅雨入りの河原曾良日記

直江 裕子

梅雨の木にまだ棲みついてゐる昭和  
若書きの気負ひか紙魚を走らせる

濡れ濡れし草につがひの糸蜻蛉  
池めぐる百のあぢさゐ百彩に  
アカシアの香に溶け出せり津軽富士  
ヲジロワシ夏の知床ひとり占め

松戸 岡山 敦子